

令和元年度第6回 神奈川県ボランティア活動推進基金審査会

令和2年1月29日（水）13：30～18：00

■ 開会

（基金事業課長から本日の予定を説明）

- 田中委員欠席、委員8名での開催予定。
- 会議の流れを説明
 - ・ 15時から、令和2年度ボランティア活動補助金事業（継続）のプレゼン審査
 - ・ 16時30分から、プレゼン審査に対する選考（結果発表は後日）
 - ・ 18時閉会予定

（審査会長から開会の宣言）

- 令和元年度第6回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会を開催。
- 率直な意見交換を通じて、公平な審査をする必要があり、神奈川県情報公開条例第25条第1項第1号に該当することから非公開とする。
ただし、プレゼンテーション審査は公開とする。

■ 審議事項 令和2年度ボランティア活動補助金（事業継続）の選考

（基金事業課長から以下について説明）

- ボランティア活動補助金事業の応募状況（資料1・資料2）
- 来年度のボランティア活動補助金事業に係る予算（資料3）
- 審査委員と利害関係のある団体からの申請なし

（事務局から事前調査結果等について説明（資料4・参考資料2））

（委員による審議）

- ボランティア活動補助金への申請事業に係るプレゼンテーション審査における確認事項等について検討した。

（プレゼンテーション審査の実施）

- ボランティア活動補助金への申請事業に対するプレゼンテーション審査を次のとおり行った。

【ノヴィーニェ「こども食堂&こども寺子屋」】

NPO法人アフリカヘリテイジコミティー（以下「アフリカヘリテイジコミティー」という。）によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

(為崎委員)

今年度の成果について聞きたい。昼食、夕食ともに参加者が増えているとのことだが、参加者に占める外国人の割合と、どのような国籍の方がいらっしゃるのか、教えていただきたい。

(アフリカヘリテイジコミティー)

日本人のほうが多い。外国人は20%くらい。外国人は、アフリカ系のハーフ、アジア系のハーフが少し増えた。

(為崎委員)

もともと審査会が評価したのは、外国の子どもも対象にしていた部分。今後の方向性として、外国の参加者を増やすという考えはあるか。

(アフリカヘリテイジコミティー)

考えはある。そのためにチラシを配ったり、食のバリアフリー化を進めたりしている。

(為崎委員)

最終的には、日本の子どもと外国の子どもがどのくらいの割合になるのが望ましいと考えているか。

(アフリカヘリテイジコミティー)

具体的な数字を挙げるのは難しいが、なるべく多くの方に来ていただきたいと考えている。強いて言うならば、1対1の割合になればいいと思う。

(為崎委員)

日本の困難を抱えている子どもたちに呼びかけつつ、外国の子ども達の参加も積極的に呼びかけていくということで理解した。

ボランティア活動補助金によって新たに有償で人材を雇用することで、具体的にどのような効果があったか。

(アフリカヘリテイジコミティー)

当団体の活動に理解を示してくれる方を1名雇用した。その人とボランティア達で協力して、チラシや書類の作成、ネットワークの構築等を進めている。また、複数の企業へのアプローチも行っている。

(為崎委員)

新たに雇用した方は、もともとどのような経緯で加わったのか。

(アフリカヘリテージコミティー)

以前当団体の活動に協力してくれていた方に声を掛け、再び来ていただいた。

(為崎委員)

現在は基金 21 から 60 万円の補助金が交付されているが、交付が終了すると、人件費が払えなくなる可能性もあるのではないかと考えている。今後の展望はどう考えているか。

(アフリカヘリテージコミティー)

人件費は、団体の自己資金から充当する。また、スポンサー企業を増やして、協賛金を獲得していきたいと考えている。すでに、協賛金をいただけることがほぼ確定している企業も 2 社ほどある。

(為崎委員)

現在有償で雇用している方は、いずれ無償で雇用するというのではなく、補助金終了後も有償で雇用し続け、今後も役割を果たしてもらいたいということか。

(アフリカヘリテージコミティー)

そのとおりである。

(為崎委員)

事業の安定的な継続という課題は昨年度も出ていた。最終年度、その課題は解決できるか。

(アフリカヘリテージコミティー)

できると考えている。

(為崎委員)

昨年度は、空きスペースを活用してリユースショップの設置や食品の製造販売を行うということが挙げられていたが、今年度の申請ではそういった記載はなくなり、新たにソーシャルウェディング等のアイデアが挙げられている。リユースショップの設置等はもう行わないということか。

(アフリカヘリテージコミティー)

昨年までやってきたことは継続している。それに加えて、今回の申請書に記載したこともやっていくという趣旨である。

(峯尾委員)

相模原と青葉台、日本の子どもと外国の子ども、それぞれ抱えている生きづらさの背景は違うと思う。地域や国籍によって異なるニーズをどのように把握し、それに対

してどのように対応しているのか。

(アフリカヘリテイジコミティー)

異なるニーズを全て把握することは難しいが、相模原は貧困を抱えている子どもが多く、青葉台はひとり親家庭の子どもの孤食が多い、という傾向はあると感じている。

ボランティアの間では、ミーティング等を通じて情報共有をしているほか、発達障害や食のバリアフリー問題等について勉強している。

(峯尾委員)

関わったボランティアが、一人ひとりの子どもの背景を理解する努力をし、それをミーティングで共有しているということによって理解した。

(長坂会長)

全体の参加者数は増えているが、これは目標を達成したという感じなのか。

(アフリカヘリテイジコミティー)

目標はまだ達成していない。目に見えない生きづらさを感じている子どもを少しでも助けたいという思いがある。何人が参加すれば目標達成、というものではない。来てくれる子どもは全て受け入れられるような体制を作っていきたい。

(長坂会長)

ダイバーシティを意識して事業を展開していくという話があった。外国の方や障害のある方、様々な人が集まる場所を目指すことが一番重要である、ということを改めて意識してほしい。

【人材育成 仕事と子育て両立体験研修事業「家族シミュレーション」】

特定非営利活動法人びーのびーの（以下「びーのびーの」という。）によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

(中島委員)

このプログラムの目的を改めて説明してほしい。

(びーのびーの)

我々が活動を始めた 20 年前と比べて、今は色々な制度が増えてきているが、子育てのしづらさを抱えている家庭はまだ多いと感じている。一方、育児と仕事を両立することが当たり前になった時代の中で、育児にかかる時間が少なくなっている状況もある。そういった状況の中で、もう少し早い段階から、子どものことや子育てのことを知ってもらう機会を増やしたいと思い始めた。子どもを増やしたいというわけでは

なく、子育てに関して理解を持つ方を増やすというのが一番の目的である。

(中島委員)

今の説明だと、個人が対象のように思える。子育てと仕事を両立できるような企業環境を整えるために、企業の方に理解を求めて研修を行っていくのがこの事業の目的だと認識していたのだが、そうではないのか。対象は個人と企業、どちらなのか。

(ビーのビーの)

両方である。企業へのアプローチもしているが、そこはまだ弱い部分。まずは、企業の中の個人に体感してもらい、仕事の脱属人化の必要性を実感していただくこと等を通じて、お互い様のものづくり、ということを経営者に提案していきたい。

(中島委員)

すでに事業を2年間やられて、色々な企業にアプローチしたり、アンケートをとったりしていると思うが、その中でどのような企業をターゲットにしているのか。地域貢献意識の高い企業もあれば、そうでもない企業もある。本来、貴団体がアプローチしたいのはどういった企業なのか。

(ビーのビーの)

子育てをキーワードにして、保育士の働き方についてのプログラム開発をしている企業や、子どもの物をつくるメーカー等にアプローチをしている。

(中島委員)

それは、そういった企業のほうが、この事業に理解があるからということか。

(ビーのビーの)

それもあつ。あとは、規模の小さい中小企業だと、趣旨は理解してもらえても、人を出してもらえないという理由もある。

(中島委員)

もう一度確認させてほしい。本当の目的は、子育てをする環境が整っていない企業の人達であっても子育てと仕事が両立できるように、プログラムを作るということでよいか。それを前提にすると、本当にアプローチしたいのはどういった企業か。

(ビーのビーの)

今は我々のネットワークの中でお付き合いのあるところに少しずつアプローチしている状況である。女性が少しずつ活躍しているような建築業界等にもアプローチしたいという思いはあるが、まだ手が届いていない。

(中島委員)

ひろばの夜間活用と家庭での体験とで、成果の差はあったか。

(ビーのビーの)

家庭での体験だと、その家族のお話しか聞けないということがあったが、ひろばを活用すると、複数の親子の話を聞けるので、共通した悩みなどもわかり、参加者の方にも納得いただけた、という成果があった。

(尹委員)

県内事業所の大半は中小企業という現実があり、そこへのアプローチは今後の事業の展開にあたって重要だと思う。困難さはあると思うが、中小企業の開拓について、具体的にどのように考えているか。

(ビーのビーの)

アドバイザーの専門家から紹介された商工会議所にアプローチしている。また、神奈川県法人会の綱島東支部にも加入し、そのネットワークを通じて、ある信用金庫にこの事業をご理解いただき、いつでも協力させてもらえるようにしている。

(尹委員)

実際に中小企業にアプローチして、進捗や手応えはあったか。

(ビーのビーの)

事業自体のよさは理解していただけるが、参加するとなると社員は 17 時頃に退社する必要があるため、社員に参加を呼びかけにくいということと、怪我等何かあったときにどうするかということをお心配される。そういった問題については、アドバイザーに相談し、知識を得ながら対応していこうと考えている。

(尹委員)

ひろばの夜間活用にも利点があるとは思いますが、やはり個人の家庭を直接訪問することで得られるものの大切さがあると思う。それについてはどう考えているか。また、企業とのつながりができたのであれば、企業から社員を紹介してもらい、その家庭を訪問するという事もできると考えられるが、いかがか。

(ビーのビーの)

敷居を低くした方が、参加者が集まるのではないかと考え、日数や内容の異なるコースを3つ用意した。やはり、1日で終了するAコースの参加者が圧倒的に多かった。

今後は、ひろばの夜間活用を実施していくが、回を経るごとに、もっと関わりたいと考えてくれる人は出てくると思うので、他のコースのことも伝えていきたいと思う。

企業から訪問家庭を紹介してもらおうという視点はこれまでなかったので、検討した

い。

(尹委員)

参加者から寄せられた感想の中で、エンドユーザーの立場になったことで、あったらいいと思うサービスを考えるきっかけになったという声がある。実際、子育てを切り口としてそれを仕事に活かす、ということができると思うが、具体的にこう活かしたいという展望があればお聞きしたい。

(びーのびーの)

企業の方からは、社員が会社を離れて研修に参加するのは難しいが、出張講座をしていただけるなら参加したい、という声が3件ほどある。これまでつながりのなかった企業からも、大規模マンションを開発する中で子育ての講座を開いてほしい、という声をもらっている。今後はこうしたことにも取り組んでいきたい。

【親子きつおん交流会事業】

特定非営利活動法人よこはま言友会（以下「よこはま言友会」という。）によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

(渡邊委員)

地道な活動で、着実に頑張ってきていると思う。3年後のゴールのイメージとそれに向けての課題を教えてほしい。

(よこはま言友会)

川崎市中部身体障害者福祉会館を使って、日曜日に子ども例会をやりたいと考えている。それ以外の拠点も探している。親子きつおん交流会は継続して実施していきたいと考えている。

(渡邊委員)

資金調達に関して、例えば協賛金を得られるような手段は検討していないのか。

(よこはま言友会)

親子きつおん交流会は無料でやるというのがコンセプトである。成人向けのイベントでは、1人あたり300円から500円程度の参加費をいただいているが、それはそのイベントの経費として使い切ってしまう。親子きつおん交流会は、会員を増やし、それによる会費の増加を充てて実施していきたいと考えている。

(渡邊委員)

成人向けのイベントでは収益は出ていないということか。

(よこはま言友会)

これまでは、参加費収入はほぼそのイベントの経費として使い切っていた。もちろん、仮に今後の部分で余剰が出るようになれば、親子きつおん交流会の実施に充てていく。

(渡邊委員)

人件費が計上されていないが、無償のまま継続してやっていけるか。

(よこはま言友会)

昨年度から、ボランティアには交通費として1,000円支給している。場合によってはさらに削減することになるかもしれないが、それでなんとかやっていきたい。

(渡邊委員)

会の実力はまだまだという記載があるが、それはどういった意味か。

(よこはま言友会)

会の中に、活動できるメンバーが少ない。どんどん活動できる会員を増やしていきたい。

(渡邊委員)

新規の人材の育成ということはあまり考えていないのか。

(よこはま言友会)

若い会員も増えてきているので、そういう方に対してイベント運営のボランティアをお願いすることで育成につなげていきたい。

(渡邊委員)

募集して育成するのではなく、来てくれたボランティアの方を育成するという事か。

(よこはま言友会)

会員をボランティアとして育成する。

(長坂会長)

誠実に、堅実に、着実に事業を実施していただいていることに敬意を表す。とても重要な事業だと思う。この1年間の活動で大きなニーズがあるということがよくわかったが、県内に吃音の方はどのくらいいるのか。

(よこはま言友会)

どもってしまう人は100人に1人とされている。小さい頃どもっていても、成長に伴い、小学生くらいの頃に治る子も8割程度いて、残り2割くらいが、そのまま吃音を抱えていく。

(長坂会長)

審査会としてはニーズの高さがよくわかり、またできることなら全てのニーズに対応してほしいという気持ちがある。ただ、会員が50名以上いても、実際に動くことができる会員が少ないということも承知している。今後、活動を広げていくために、どのようなことをしているか教えてほしい。

(よこはま言友会)

会員の中には、耳鼻咽喉科の医師や言語聴覚士等、専門性のある方もいるが、数は少ない。専門的知識を持った方の入会を増やすとともに、吃音をもつ子どもの保護者も会のネットワークに引き込んでいきたいと考えている。

ただ、先ほど説明したとおり、子どもの吃音は成長に伴って治ることも多いので、ある意味ではニーズが不安定とも言える。

(長坂会長)

たとえば、自治体の担当と話をしたりすることはないのか。あくまでも団体のみで活動するのか。

(よこはま言友会)

現在は、イベントの後援をお願いする程度。話をするタイミングやきっかけがあれば、ぜひ話をしたい。

(長坂会長)

基金21の中にも協働事業がある。自治体の仕組みの中にこの問題をどんどん落とし込むことができればいいと思う。

【編み物で繋ぐ日本の高齢者の生きがい作りと途上国の衛生改善】

特定非営利活動法人地球市民ACTかながわ（以下「地球市民ACTかながわ」という。）によるプレゼンテーション実施。

【質疑】

(高橋委員)

ユニークな事業で、テーマ性もあり素晴らしいと思う。

編み手の拡大と資金調達のバランスについての考え方と、海外での効果測定の実施状況を聞きたい。

(地球市民ACTかながわ)

団体としても、バランスは重要だと考えている。施設に行くと、高齢者は一生懸命編んでくださるが、必ずしも全てをすぐに海外に届けられるわけではない。今のところ、バランスはとれている。20ほどの施設の方と個人の方が編んでくださり、年間1万個程度のエコたわしをいただける。

今後、施設を拡大していくとエコたわし在庫が増えてくる。JICAとは連携がとれているので、今後もバランスをとりながら事業を進めていきたい。

海外での効果測定は、これから始めたいと思っている。あまり長いアンケートは迷惑になるので、インターネットを利用して簡単に答えられるアンケートを作成したい。

また、報告書を出してくださる方もいるので、そういったところから定性的なものを抽出したい。

(高橋委員)

資金調達はどのようにするのか。

(地球市民ACTかながわ)

活動に賛同して寄附をしてくださる方も増えているし、ノベルティとしてエコたわしを買い取ってくださる企業もある。買い取ってくださるという話があったときは、販売してよいかあらかじめ編み手の方に確認し、了承していただいた方が編んだエコたわしのみを販売するようにしている。

また、インターナショナルスクールで開催されるクリスマスバザーに出店し、募金をお願いしたりもしている。今年度も、今の時点で計30万円程度の寄附をいただいている。

(高橋委員)

素材を渡すと早く編むよう急かされているように感じるため、自分たちで素材を購入する、と言われたことがあるという話があった。これは、高齢者の生きがい、やりがいを生み出すという点で、示唆に富んでいると思う。こうしたことをどのように今後につなげていきたいと考えているか、教えてほしい。

(地球市民ACTかながわ)

毛糸を差し上げれば参加しやすいと考えていたため、初年度は素材である毛糸の購入費を多めに計上していた。毛糸を購入して施設に持っていったところ、素材は自分で用意するので、毛糸を購入する分のお金は途上国の子ども達のために寄附してほしいと言われたことがある。逆に、もっとたくさん編みたいので、もっともっと素材がほしいと言われたこともある。素材を渡すかどうかは状況に応じて対応していく必要があるが、いずれにせよ、編んでくださる方のモチベーションを高めるためにも、現地の様子を伝えるというのが一番大事だと思っている。

(水澤委員)

天然素材にシフトしていくという話があったが、アクリルたわしは素材がアクリルだからこそ効果があるのではないか。また、それに関連して、たわし以外は作れないのか。アクリルたわしにこだわる理由があるのか。

(地球市民ACTかながわ)

アクリルは細かい繊維で汚れをかき出してくれる。発色もよく、長持ちする。また、通常のスポンジやメラミンスポンジからもマイクロプラスチックは出るため、一概にアクリルたわしだけが危険ということでもない。しかし、マイクロプラスチックに対する懸念が高まっている現状を踏まえると、少しずつ天然素材にシフトしたほうがよいと考えている。

以前、ミャンマーにブローチを持って行ったことがあるが、エコたわしのほうが、そういったものより需要が高いのではないかと考え、今はエコたわしを送っている。

ただ、もっと違ったものがあったらいいとも考えているので、色々なアイデアを出していきたい。

(長坂会長)

高齢者の生きがいづくりと国際協力を結び付けたところに、この事業の素晴らしさがある。今はエコたわしによってその結び付きを生んでいるが、例えば高齢者の方とフェアトレード商品の販売を結び付ける等、色々なアイデアがあり得ると思う。そうしたものを、今後も追求していただきたい。

(委員による審議)

- ボランティア活動補助金への申請事業に係るプレゼンテーション審査の結果を踏まえて審議を行い、対象事業を選考した。

※ 結果は2月19日(水)に発表。

■ その他 令和2年度ボランティア活動推進基金21年間予定について

(基金事業課長から令和2年度年間予定案について説明(資料5))

■ 閉会

(原田所長より挨拶)

(審査会長より閉会の宣言)

- 令和元年度第6回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会を閉会する。

以上